

ラテン語とフランス語

古典作品を素材に [18]

ブルガータ訳聖書「出エジプト記」より — 命令の表現をめぐって —

秋山 学

今月は、再びラテン語ブルガータ訳聖書からテキストを選ぶことにしましょう。以下に掲げるのは、旧約聖書『出エジプト記』第20章からの一節です。

原文 Cūctus autem populus vidēbat vōcēs et lampadēs et sonitum būcinae montemque fūmantem; et perterritū ac pavōre concussī stetērunt procul dicentēs Mōysī: « ①Loquere tū nōbīs, et audiēmus; ②nōn loquātur nōbīs Deus, nē moriāmur ». Et ait Mōysēs ad populum: « ③Nōlīte timēre; ut enim probāret vōs, vēnit Deus, et ut timor illius esset in vōbīs, nē peccārētis ». Stetitque populus dē longē; Mōysēs autem accēssit ad cāliginem, in quā erat Deus. — *Liber Exodus* 20, 18-21

仏訳 Tout le peuple, voyant ces coups de tonnerre, ces lueurs, ce son de trompe et la montagne fumante, eut peur et se tint à distance. Ils dirent à Moïse: « ①Parle-nous, toi, et nous t'écouterons; ②mais que Dieu ne nous parle pas, car alors c'est la mort. » Moïse dit au peuple: « ③Ne craignez pas. C'est pour vous mettre à l'épreuve que Dieu est venu, pour que sa crainte vous demeure présente et que vous ne péchiez pas ». Le peuple se tint à distance et Moïse s'approcha de la nuée obscure où était Dieu.

訳 民全体はこの雷鳴、稲妻、角笛の響き、燃える山を目にした。そして、驚愕し恐れに震えながら離れて立ち、モーセにこう言った。「あなたがわたしたちに語ってください。そうすればわたしたちは聞くでしょう。神には、われわれに語らないでいただきたいのです。わたしたちが死なないためです。そこでモーセは民に言った。「恐れてはならない。なぜなら神が到来したのは、あなた方を試みるためであり、あなた方が罪を犯すことのないように、神への畏れがあなた方の中に確立するためのからだ」。民は遠方に立った。一方モーセは、そこに神がおられる闇へと近づいて行った。

上に引いた一節は、有名な「十戒」(出エジプト20, 2-17)のすぐ後に続く部分です。

旧約聖書では、神の顕現をまともに目にすると、人間は死ぬとされていました(出エジプト33, 20)。今回は、さまざまな命令表現について考えてみましょう。まずラテン語には命令法として、「命令法現在」「命令法未来」の二つがあります。前者は「第1命令法」とも呼ばれ、2人称の単数形と複数形に対する活用形を持ちます。一方後者は「第2命令法」とも呼ばれ、2人称の単数形と複数形のほか、3人称の単数形と複数形に対する活用形を持ちます。上の一節では、①Loquere という語形にこの命令法が用いられています(形式的受動相動詞 loquor【不定詞は loqui】の命令法現在2人称単数形)。なおヘブライ語の原文には dabbēr とあり、これは「語る」dāḅar のビエル態【「強勢形」】・命令法2人称単数形(男性)です。ヘブライ語には2人称単数・複数に対する命令法が存在しますが、セム語族に属するので、各々に男性形と女性形があります。

一方、民の言葉②« nōn loquātur nōbīs Deus »の部分、訳文では「神には、われわれに語らないでいただきたいのです」としましたが、ヘブライ語の原文では、「指示法」(jussive)という「穏やかな命令を表す」法の3人称形が、否定辞 'al と共に用いられています(yēdabbēr: 上記 dāḅar の指示法・ビエル態3人称単数男性形)。ヒエロニムスはこれを nōn + loquātur (上記 loquor の接続法現在・3人称単数形)で訳しています。通常の否定願望であれば、nē + 接続法を用いるところでしょう。

またラテン語における否定命令は、上の③Nōlīte timēre のように、動詞 nōlō (不定詞は nōlle) の命令法 + 不定詞で表します。この部分、ヘブライ語の原文では上と同様に否定辞 'al + 指示法で表されていますが、対象が2人称であり、否定命令の表現となっています(tīrā'ū: 「恐れる」yārē' の指示法・バアル態【通常形】2人称複数男性形)。

上掲の仏訳は、取り上げた3つの箇所に関して、まず①Loquereの部分では「Parle」、③Nōlīte timēreの部分では Ne craignez pas と、いずれも2人称に対する命令法を用いて訳しています(各々単数形と複数形)。フランス語にはこのほかに、1人称複数形に対する命令法の語形が存在しますが、これは、英語なら「Let us...」にあたる語法を「1人称複数に対する命令」と理解したものと言えるでしょう。一方②nōn loquāturの部分は文意を汲んで、que + 接続法で訳しています。これは、命令法では表せない人称、主として3人称に対する、話者の意志や願望を表すための構文です。

ちなみにギリシア語の命令法には、現在形、アオリスト(単純過去)形、現在完了形(比較的まれ)があります。ギリシア語訳旧約聖書では、①は「Ἀλάξσον」(lalēson)で命令法アオリスト2人称単数形が、②は「μὴ λαλεῖτω」(mē laleitō)で否定辞 μὴ + 命令法現在3人称単数形が各々用いられています。命令法現在と命令法アオリストの差異は、「アスペクト」(動作態)の違いであり、前者は継続相、後者は瞬時相における動詞把握によるものです。これに対して③では、否定命令ではなく「θαρσεῖτε」(tharseite)「勇気を出せ」(命令法現在2人称複数形)と意訳されています。(あきやま・まなぶ)